

中国語の動詞に後置される“到”について

——日本語の視点から——

平石 淑子

中国語の動詞に後置される“到”について

日本人学習者にとって習得が難しい中国語の文法事項の一つに「補語」がある。

中国語の「補語」は、「述語の動詞または形容詞の後に置かれて、述語の表す内容（例えば動作、行為、性質、状態）をさらにくわしく説明する成分」（守屋宏則『やさしくくわしい中国語文法の基礎』¹⁾）と説明される。守屋（1995）は更に補語を、様態補語、結果補語、方向補語、可能補語、数量補語に分類する。いずれの補語も日本人にとっては習得が難しいのだが、その理由の主たるものとして、中国語と日本語における動詞の相違がある。

教室における経験からいうと、日本語の、特に会話文は省略が多く、動詞すらもその対象となり、周囲の状況などによって補われる要素が、中国語に比して格段に多いため、自然な日本語を中国語に翻訳しようとするとき、様々な問題が生じる。初歩的な誤りとしては動詞が欠落した文（或いはすべての動作を“是”で代用できると考える誤り）が現れるし、中級以降はアスペクトや補語を知ることにより、動詞の扱いについて混乱を生じやすい。

中国語の動詞の特徴について、守屋（1995）は次のようにいう。

日本語の動詞はどちらかといえば動作・行為とその結果までを全部含んで言い表すことが多いのに対し、中国語の動詞は、一般に動作・行為について言い表すだけで、その結果がどうであるかには言及しないことが多いのです。ただ“了”を加えるだけでは結果を言い表すことにはなりません。

そこで、結果補語の任務を帯びた動詞・形容詞が多用されることになります。

畠山雄二編『日本語の教科書』²⁾に、日本語の動詞について、興味深い指摘がある（田中・本田・畠山「日本語の個性：他言語からの考察」）。それによれば、日本語の動詞には「やったができなかった」といえるタイプといえないタイプがある。例えば「燃やす」は「燃やしたが、燃えなかった」といえるが、「捕まえる」は「捕まえたが、捕まらなかった」とはいえない。その理由として田中・本田・畠山は「燃やす」という動詞が「燃やす」という行為とその行為の結果「（ものが）燃える」という二つの意味に分解することよるとしている。「燃やす」という行為の結果として「燃える」ことに失敗した、即ちこの文で否定されるのは「動詞の意味が持つ結果状態である」。これに対し、「捕まえる」は「結果状態まで必ず表す」から「やったができなかった」という構文は成立しないと指摘している³⁾。日本語の動詞の中にも、「極めて抽象的にとらえれば、何らかの動作・作用や状態がすでに実現し、確定したものにとらえられることを表す」（『日本語教育事典』⁴⁾）「た」を付すだけでは結果を表せないものがあるというこの指摘は、前出の守屋（1995）の指摘に関わって興味深い。つまり日本語の動詞の中には「燃やす」のように、動作自体がある時間的経過をその中に含んでいるものとそうでないものがあるということだ。だが日本語母

語話者は通常、動詞に上記のような二種類があるということをどれほど意識しているだろうか。日本語の動詞にこの二種類があることが、中国語の動詞やその動作、行為の結果の表し方に対する理解をより混乱させているのではないだろうか。

ここに日本で中国語を学ぶ学生 124 名に対して行った興味深いアンケートの結果がある⁵⁾。回答者はほとんどが大学生で、週 1 回から 2 回中国語を学んで 1 年～数年以内の男女である。しかし中には中国への短期、長期の留学経験を持つ者もあり、また日本で生まれて育ったが両親または片親が中国人の、いわゆるバイリンガルの学生が 18 名混在している。アンケートは 10 問の和文中訳を求めるものであるが、うち 3 問に動詞の後に結果補語が使われる、あるいは使うことのできる問題が含まれている。その 3 問と模範正答は以下の通りである。(二重下線が「動詞+補語構造」である。)

ア) 帽子が風に飛ばされた。

帽子叫 / 被 风刮跑 / 走 了。

イ) 母は花を枯らさないように、毎日水をやる。

妈妈每天给花浇水, 不让它枯死。

ウ) お茶がなかったので、買っておきました。

没有茶了, 我 (又) 买了一些 / 我买来 放在那儿了。

いずれも和文中訳としてはかなり高度な問題であるが、回答するにあたり、辞書を引かない、質問しない、相談しない、限られた時間内 (15 分) で答える、わからない単語はそのまま日本語で書いてよい、という条件を出した。その結果、正答か否かは別として、ア) で補語を使用した者は 21 名 (模範正答と完全に一致した者は 2 名)、うち 17 名がバイリンガルで、残り 4 名の非バイリンガルのうち、中国への留学経験を持たない者は 1 名であった。またイ) では 12 名が補語を使用した (模範正答と完全に一致した者は 0 名)、9 名はバイリンガル、残り 3 名はいずれも中国への長期留学経験を有していた。ウ) については、“买”に補語が必要だと考えた者は 15 名 (模範正答と完全に一致した者は 0 名)、うち 9 名がバイリンガル、残り 6 名のうち 3 名は中国に一年以上の留学経験を有していた。“放在”を使用した回答はなかった⁶⁾。

以上の結果を見ると、バイリンガルであることが必ずしも補語を的確に使える条件にはならないものの、中国語を母語とほぼ同じように使える人々にとって、補語の使用、或いは補語を発想することは、さほど難しいことではなさそうである。それに対し、日本語母語話者の方は、アンケート結果を見る限り、留学などを経て経験的に獲得する語感に頼る所が大きいように見え、それは即ち教室内での獲得の難しさを物語っているように思える。かといってすべての中国語学習者が経験的に獲得するチャンスを持てるわけではなく、教室内でも確実に獲得するための教学上の工夫を、我々はしていかなければならない。本稿の目的は、その初期段階として、適切な工夫の手がかりをつかもうとする所にある。日本語のどのような表現が中国語では補語で表現されるのか、またどのような補語を用いればよいのかが、日本語の方から想起、発想できないだろうか。もちろん異なる言語であるから、絶対的な要件を期待はできないが、ある程度の目安をつかむことができ、日本語との対応の中から基本的な語感を獲得できれば、それを基礎として補語に対する理解がよりスムーズになるのではないか、と考えている。

二

日本語と補語の対応について、芥川龍之介の小説「羅生門」の、異なる3種の訳訳文を観察することにする。補語の使用に関して、中国語母語話者間に個人差はないのか、動詞や補語の選択について、絶対的な条件が存在しているのかどうかについて、同一の日本語に対する異なる訳文を比較してみることは有効であろう。なお本稿は、3種の訳文を比較してその優劣を論じようとするものではないことをあらかじめ断っておく。

考察対象としてここでは結果補語を選択するが、それは前述したように、中国語の動詞の特徴が強く反映され、そのために日本語母語話者に理解が難しいことによる。抽出に当たっては、『中日辞典』（講談社、第二版）の解説等を参考に、以下のような基準を設けた。

- ①述語動詞の直後に出現する動詞、又は形容詞であること
- ②動詞の後の成分が何らかの形で動作・行為の結果を表していること
- ③アスペクト助詞“了”“过”や目的語が動詞と補語の間に割り込まないこと

考察を進める前に、上記の②に関しては、それが補語である絶対条件とはならないという考え方があることに触れておく。

呂叔湘『現代漢語八百詞』⁷⁾は、日本で使われている中国語のテキストでは一般的に結果補語として扱われる“在”“给”について、述語動詞の後に置かれた介詞句であると述べている。荒川清秀『一步すんだ中国語文法』⁸⁾も、結果補語は動詞との間に“得”“不”を挿入して可能表現（可能補語）を作ることができるが、“在”“给”ではこれができないことを挙げ、結果補語として扱うべきではないとしている。また陳文芷・陸世光『ネイティブ中国語 補語例解』⁹⁾はこれに“到”の一部を加えている。

だが教室ではいずれも基本的な結果補語として扱うことが一般的であるため、本稿では動詞に後置される“在”“给”“到”は補語として扱い、また“上”“来”など、一般に方向補語と呼ばれる方向動詞についても、抽象的な用法として動作の結果を表すことがあることを考慮し、抽出対象に含めた。更に可能補語に関しても、結果補語、或いは方向補語構造を基盤にしていることから、抽出対象に含めることにした。以下本稿で「動補構造」というときは、本稿で抽出対象とした以上の「動詞＋補語構造」を指している。

「羅生門」原文は岩波書店『芥川龍之介全集』（1977年）によった。3種の訳訳文は以下の通りである。

林少華訳 『羅生門』（2005年 青島出版社）所収（以下林と表記）

楼適夷訳 『羅生門』（2006年 浙江文芸出版社）所収（以下楼と表記）

聶中華・曾文雅訳 『日本名家作品選読』（2007年 四川大学出版社）所収（以下聶と表記）

三

「羅生門」は全体で152の文に分けられるが¹⁰⁾、うち、3種の訳文いずれにも動補構造が見られない文が47ある。裏を返せば全体のおよそ70%の文に対して動補構造が見られるということになる¹¹⁾。

動補構造を含む105の訳文に関しては、必ずしも3種が、使用する補語において、或いは補語を使用

するか否かにおいて、一致しているわけではない。動補構造の出現状況を3種の訳文において比較すると以下の【表1】のようなデータが得られる。なおこれは、一文の中に複数の動補構造が見られる場合もすべて各々カウントしたものである。

【表1】

	動補構造の数
1：3種の訳文に動補構造が見られる	
(i) 動詞、補語が完全に一致	12
(ii) 動詞、又は補語がいずれか異なる	40
(iii) 動詞、補語すべてが異なる	0
2：2種の訳文に動補構造が見られ、1種にはそれがない	
(iv) 2種の動詞、補語が完全に一致	13
(v) 2種の動詞、又は補語がいずれか異なる	19
(vi) 動詞、補語共に異なる	6
3：動補構造が1種にしか見られない	97

上のデータを見ると、以下のようなことがわかる。

- (A) 中国語母語話者から見て、動補構造が必要とされる日本語は必ずしも共通しているとはいえない。
- (B) 共通している場合も動詞や補語の選択においては異同があり得る。

次に、出現する補語の中で出現の頻度が高いもの上位5種を、3種の訳文それぞれに出現する動補構造の数全体における割合として示したものが、以下の【表2】である。

【表2】

	林	楼	聶
到	21.3%	28.8%	32.9%
在	25.5%	23.1%	25.7%
住	12.8%	13.5%	10.0%
开	6.4%	7.7%	2.9%
倒	4.3%	3.8%	2.9%

【表2】に見るように、他と比べて圧倒的に出現率が高いのが“到”“在”“住”の3種である。もし動詞に後置される“在”、あるいは“到”の一部が介詞構造であるとするならば、結果補語としては“住”の出

現率が最も高くなる可能性もあるが、前述したように、本稿ではその問題には言及しない。従ってここでは全体として最も出現率の高い“到”を中心に観察していくことにする。

四

3種の訳文に“到”を用いた動補構造が見られ、動詞、補語が完全に一致している文は2例ある。

(1) これを見ると、下人は始めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されておると云ふ事を意識した。

林：见此光景，仆人这才实实在在意识到老太婆的生死完全取决于自己的意志。

楼：家将意识到老婆子的死活全已操在自己手上，……

聶：看到这种情形，仆人已意识到，这个老太婆的生死，已完全凭自己的意志主宰了。

(2) 老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな声を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。

林：……发出不知是呓语还是呻吟的声响，借着仍在燃烧的火光爬到楼梯口，……

楼：……嘴里哼哈哈地，借着还在燃烧的松明的光，爬到楼梯口，……

聶：老太婆一边发出既像呻吟又像嘟囔不停的声音，一边借着仍在燃烧着的火光，爬到了楼梯口。

3種の翻訳が同一の日本語の表現に対し全く同じ動補構造を使っていることを、単純に中国語母語話者に共通する語感だと結論づけるのは危険ではあるが、興味深い。

陳・陸（2008）は（1）に見える“意识到”という表現に関して、“到”は結果補語であるとし、以下のように説明する。

この“到”は「到達」という意味で、“意识到”は「“意识”と言う心理動作の結果、あることに思い至る」、つまり「気づく」ということを表している。“意识”は“意识到”となってはじめて目的語をとることができる。

また呂（1999）は始めから“意识到”として八百詞に入れている。（1）は動詞“意识”を選択した時点で“到”の使用が決定されるようである。

一方（2）の“到”は、陳・陸（2008）の見解に従えば介詞である¹²⁾。陳・陸（2008）は、「動詞を説明する成分が客観的状况、無意識の行為、已然の出来事を表す場合、すなわち動作が発生した後でないと知覚できないものである場合は、補語が用いられるのがふつうです。（中略）逆に、話者の主観、意識的な行為を表す場合には状語（すなわち本来動詞に前置する介詞構造）が用いられます」と説明する。しかしこの説明はあくまでも動詞に“在”“给”“到”という介詞になり得る語が後置されている場合の弁別法であって、無意識の行為に対し必ず動補構造が見られることをいうものではない。だが意識、無意識という点は考えてみる価値がありそうだ。

（1）の原文「意識した」は確かに無意識的であるが、例えば「自己の欠点を意識する」、「他人の目を

全く意識しない」は意識的である。これらの日本語は、小学館『日中辞典』の“认识自己的缺点”、“对别人的看法不在意”という例文に当てられた翻訳である。確かに結果補語は使われていないが、動詞“意識”も使われてはいない¹³⁾。

「客観的状况、無意識の行為、已然の出来事」という条件に関しては、動詞の自他の別が連想される。補語の使用について、日本語の自動詞、他動詞という方面から考えることは可能だろうか。

『日本語文法大辞典』は、目的語を必要とする自動詞と目的語を持たない他動詞に大別される西欧語の動詞と日本語の動詞を比較し、以下のようにいう。

日本語の自他の区別は明確ではない。それは次のような理由による。西欧語では動詞と目的語との関係が文中の位置によって示されるのに対し、日本語では、いわゆる目的語となる語が「故郷を思う」「字を書く」のように格助詞「を」によって示されることが多い。しかし、「を」は「道を歩く」「空を飛ぶ」のように、目的語ではない語に付けても使われることがあり、「を」が目的語を識別する目安にはなっていない。ということは、目的語であるかどうかを示す語がないということになる。目的語を示す語がないということは、目的語を識別する意識がないということであり、それを基準としての自動詞・他動詞はないことになる。自動詞・他動詞の区別は別の面にもある。それは、西欧語では他動詞のみが受動態となって自動詞はそうならないということがあり、この点でも自他の弁別に意味があるが、日本語では、他動詞はもちろん、自動詞も受動態となり、この点も自他の弁別に意味がない。そういう点からも、日本語では自動詞・他動詞の区別は有効ではないと結論されることになる。

そしてその上で、日本語には「割る」「割れる」など、語幹は同じだが活用形式の異なる動詞があることを踏まえ、「自然（無意図）・意図という区別が有効になってくる」としている。この「無意図・意図」という区別は前述の中国語の「無意識・意識」に当てはまるだろうか。

(3) 殊に門の上の空が、夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうに、はつきり見えた。

林：尤其门上方的天空回光反射之时，乌鸦浑如播撒的芝麻历历在目。

楼：特别到夕阳通红时，黑黝黝的好似在天空撒了黑芝麻，看得分外清楚。

聶：特别是当罗生门上空夕阳夕照时，更可以清晰地看到乌鸦高居其上，密密麻麻的如同撒落的芝麻一般。

(4) ——尤も今日は、刻限が遅いせみか、一羽も見えない。

林：不过，今天或许时间已晚，竟无一只飞临。

楼：——今天因为时间已晚，一只也见不到，……

聶：但是今天，可能是因为太晚的原因，竟连一只乌鸦也看不到。

(5) 唯、所々、崩れかゝつた、さうしてその崩れ目に長い草のはへた石段の上に、鴉の糞が、点々と白くこびりついてゐるのが見える。

林：目中所见，尽是已开始塌裂且从裂缝中长出长长杂草的石阶上点点泛白的乌鸦粪。

楼：……但在倒塌了的砖尸缝里，长着长草的台阶上，还可以看到点点白色的鸟粪，……

聶：看到的只是到处都将断裂、并且裂缝中长出老高青草的石阶上，鸟粪斑斑点点，犹如白瓜子一般。

(6) 見ると、楼の内には、噂に聞いた通り、幾つかの屍骸が、無造作に棄てゝあるが、火の光の及ぶ範囲が、思つたより狭いので、数は幾つともわからない。

林：一看，里面果如传闻所言，几具死尸横躺竖卧地扔着。但火光照到的范围却意外狭小，看不清尸体的数量，……

楼：果然，正如传闻所说，楼里胡乱扔着几具尸体。火光照到地方挺小，看不出到底有多少具。

聶：一眼望去，罗生门城楼里正像传说的那样，有几具尸骸横七竖八地扔在那儿。但是，由于火光照射的范围比自己想象的还要狭窄，因而仆人看不清楚到底有几具尸体，……

(7) 唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の屍骸と、着物を着た屍骸とがあると云ふ事である。

林：……仅可模模糊糊地辨出有的着衣，……

楼：能见到的，有光腴的，也有穿着衣服的，……

聶：……只能隐隐约约地感到既有赤身裸体的尸体，也有仍穿着衣服的尸体。

(8) 勿論、下人は、さつき迄、自分が、盗人になる気でゐた事などは、とうに忘れてゐるのである。

林：当然，刚才自己本身还宁肯为盗的念头早已忘到九霄云外。

楼：当然，他已忘记刚才自己还打算当强盗呢。

聶：仆人自然也把他刚才想当强盗的事忘记得一干二净。

(9) その時、その喉から、鴉の啼くやうな声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝はつて来た。

林：……鸟啼样的声音上气不接下气地传到仆人耳畔：

楼：……从喉头发出乌鸦似的噪音，一边喘气，一边传到家将的耳朵里。

聶：这时，仆人听到老太婆气喘吁吁地从喉咙里发出犹如乌鸦啼叫一般的声音：

(10) すると、その景色が、先方へも通じたのであらう。

林：或许是这情感波动传导给对方，……

楼：老婆子看出他的神气，……

聶：那神色，想必老太婆也看到了。

以上は3種いずれかの訳文に「動詞+到」が見られる日本語の原文のうち、日本語の動詞が無意図であると判断されるものである。これを見ると、補語の使用率は高いが、使用が絶対条件であるとも思えない。

(9) は3種の訳文とも「到」が使われているが、聶は原文の「伝はる」をそのまま訳さずに、意識的な動詞である“听(聞く)”を使用することで、下人の、全身の五感をとぎすませたその緊張の様を表そうとしているように見える。

(7) の「知れる」に関しては、原文と同じ表現が他に一箇所発見される。

(11) これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の糸をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。

林：那浑浊的黄色光亮在挂满蛛网的藻井上摇摇晃晃，一看便知上面有人。

楼：这火光又这儿那儿地在移动，模糊的黄色的火光，在屋顶挂满蛛网的天花板下摇晃。

聶：……那火光在黑暗中扑闪的，昏暗幽黄的火光，在城楼各个角落都挂着蜘蛛网的天花板上晃动着、映照著。

しかしここでは3種いずれも動補構造を使用していない。日本語の「意図・無意図」という識別は、結果補語を必要とするか否かという判断には有効ではなさそうだ。

五

一方、(2)の「這つて行つた」は「這つて+行つた」という動詞の複合形式であるが、このような構造から補語の使用について判断することは可能だろうか。「行つた」は本動詞であるから¹⁴⁾、「這つて行つた」だけを取り出せば“爬去”という訳語が恐らく自然に想起されるが、実際には「人・事物が動作につれて話し手から“離れて行く”事を示す」(白水社『中国語辞典』)“去”ではなく、「人や物が動作の結果ある場所・時点・程度・範囲に至ることを示す」(白水社『中国語辞典』)“到”が使われている。この根拠は、原文の「這つて行つた」に前置されている、「動作や作用や事態などの及ぶ先・行きつく先を表す」(『日本語教育事典』)「(梯子の口) まで」にある。ここに糸口を見出すことはできないだろうか。

全文を通して原文に「～まで」が使われている例を見ると、他に3例発見することができるが、うち1例は強調の「(云ふ) まで (もない)」¹⁵⁾、もう1例は時間の到達を表す「(今) まで」であるので、ここでは問題としない。

(12) 下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。

林：仆人如壁虎一般蹑手蹑脚爬着楼梯，终于爬上顶头。

楼：家将壁虎似的忍着脚声，好不容易才爬到这险陡的楼梯上最高的一级，……

聶：仆人像壁虎似的，蹑手蹑脚，好不容易才登上楼梯的最上边一级。

(12)では“到”を使用した動補構造が見られるのは楼だけである。「～まで」も「動詞+到」の使用に関して有効な識別法であるとはいえないようだ。

しかし「動作や作用や事態などの及ぶ先・行きつく先を表す」日本語の助詞は「～まで」だけではない。「行く先・方向を表す」「～へ」は(2)(12)の「～まで」といい換えが可能であり、また(9)(10)の「～へ」は「～まで」といい換えが可能である。

(2) 梯子の口へ、這つて行つた

(12) 一番上の段へ……上りつめた

- (9) 下人の耳[・]まで[・]伝はつてきた
 (10) 先方[・]まで (も) 通じたのであらう

日本語原文の「～へ」に対して3種が共通して補語に“到”を用いている例は2例ある。

- (9) その時、その喉から、鴉の啼くやうな声が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ伝はつて来た。

林：……鸟啼样的声音上气不接下气地传到仆人耳畔：

楼：……从喉头发出乌鸦似的噪音，一边喘气，一边传到家将的耳朵里。

聶：这时，仆人听到老太婆气喘吁吁地从喉咙里发出犹如乌鸦啼叫一般的声音：

- (13) さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。

林：他手按鲨鱼皮柄腰刀，大踏步走到老太婆跟前。

楼：……一手抓住刀柄，大步走到老婆子跟前。

聶：……右手紧握着木柄长刀，大步跨到老太婆眼前。

(9) (13) の動補構造に対応している日本語はそれぞれ (9) が「伝わつ+て+来る」(動詞+て+補助動詞¹⁶⁾)、(13) が「歩み+よる」(動詞複合形式) という複合構造である。このことから、日本語母語話者にとって、動詞に何らかの補足成分が必要であることを理解することは比較的容易である。更にそれらの動詞に前置されている「～へ」が指し示すものが「下人の耳」、「老婆の前」といった、それぞれに伝わる先の場所、歩み寄る先の場所であることを考えると“到”の想起には無理がない。また (9) だけでなく、(13) の「～へ」も「～まで」といい換えることが可能である。

- (13) 老婆の前[・]まで[・]歩みよつた

だが原文に行き着く先を示す「～へ」があっても、それが必ず“到”と訳されるとは限らない。

- (14) さうして、この門の上へ持つて来て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。

林：……进而被人像拖狗一样拖来扔在这门楼上。

楼：……然后像狗一样，被人拖到家门上扔掉。

聶：死后也被人拖到此地，像扔畜生一样嫌恶地弃掉。

- (15) それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く屍骸の上へ蹴倒した。

林：……一脚把抱住自己腿不放的老太婆踢倒在死尸上。

楼：……把缠住他大腿的老婆子一脚踢到尸体上，……

聶：……把想要抱住他腿的老太婆狠命一脚踢翻在尸骸上。

- (14) (15) の「～へ」は「～まで」といい換えは可能だろうか。

- (14) この門の上まで持つてきて
 (15) 屍骸の上まで蹴倒した(*)

(15)「～まで」は明らかに不自然である。それは「蹴倒す」という動詞が、「蹴倒したが、蹴倒せなかった」といえないことから、その中に時間的経過が含まれていないと考えられることと関係があるだろうか。そして、“到”に関して見た場合、(14)は楼と聶に“到”が見られるのに対し、(15)は楼にしか“到”が見られないこととこれは関係があるだろうか。

(14)(15)の訳文について気づくのは、“到”を用いない場合、補語の位置に“在”が出現していることである。(14)では棄てられる場所を“到”に後置する(楼、聶)か“在”に後置する(林)かの選択があり、(15)林、聶では動補構造の後に、更に“在”が置かれ、場所を後置するが、補語として“到”を用いた楼に“在”は使われていない。“到”と“在”は共起することがないようだ。

「羅生門」の訳文の中には、3種に共通して動詞に後置される“在”が出現する文が5例見出せる。

- (16)旧記によると、仏像や仏具を打碎いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に売つてゐたと云ふ事である。

林：据旧书记载，佛像和祭祀用具也已被毁，涂着红漆或饰有金箔银箔的木料被人堆在路旁当柴出售。

楼：照那时留下来的记载，还有把佛像，供具打碎，将带有朱漆和飞金的木头堆在路边当柴卖的。

聶：据史料记载，萧条时期的应考人竟然把佛像，佛具捣毁，把寺庙中那些涂有红漆的，有金银纸的木头，堆积在道路两旁当柴火卖。

- (17)丹塗の柱にとまつてみた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまった。

林：那只伏在红漆柱上的蟋蟀，早已不知去向。

楼：蹲在朱漆圆柱上的蟋蟀已经不见了。

聶：……停在朱红色圆柱上的那只蟋蟀，也早已不知藏到何处去了。

- (18)さうして、この屍骸は皆、それが、嘗、生きてゐた人間だと云ふ事実さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがつてみた。

林：而且全部泥塑木雕似的张着嘴巴伸着胳膊，狼籍地倒在楼板上，甚至很难相信他们曾是活人。

楼：这些尸体全不像曾经活过的人，而像泥塑的，张着嘴，摊开胳膊，横七竖八躺在楼板上。

聶：他们简直就像捏出的泥人一样，有的咧着个大嘴，有的张着胳膊，杂乱无章地躺倒在地板上，

……

- (19)それほど、この男の悪を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上がり出してゐたのである。

林：也就是说，仆人对恶的憎恨之心已如老太婆插在地板上的松明势不可挡地燃烧起来。

楼：他的恶恶之心，正如老婆子插在楼板上的松明，烘烘地冒出火来。

聶：此时，这个男子对恶的憎恨之情，恰似老太婆那插在楼板缝里的松明一般，正熊熊燃烧起来。

(20) 下人は、剥ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

林：……仆人把剥下的桧树皮色衣服夹在腋下，转眼跑下楼梯，消失在夜的深处。

楼：……腋下夹着剥下的棕色衣服，一溜烟走下楼梯，消失在夜暗中了。

聶：仆人把剥下来的紫黑色衣服夹在腑下，转瞬间顺着陡峭的楼梯，飞快地消失在黑黝黝的夜色中。

この中で「～へ」を用いているのは(20) 1例であり、他はすべて「～に」である。これらの格助詞をそれぞれ「～へ」「～まで」「～に」にいい換えてみるとどうだろうか。

(16) 路ばたへつみ重ねて

路ばたまでつみ重ねて(*)

(17) 丹塗の柱へとまつてみた(?)

丹塗の柱までとまつてみた(*)

(18) ごろごろ床の上へころがつてみた

ごろごろ床の上までころがつてみた(*)

(19) 床へ挿した松の木片

床まで挿した松の木片(*)

(20) 夜の底にかけ下りた

夜の底までかけ下りた

ここから、「～に」を「～まで」といい換えるのは無理だが、「～に」と「～へ」、相互のいい換えはほぼ可能だといえる。それは恐らく「～に」の持つ「行く先を表す/動作や態度が向けられる先を表す」(『日本語教育事典』)という役割が「～へ」に重なるためであろう。しかし更に観察すると、(16)～(19)の原文の動詞は、いずれもその場での動きがない、すなわちある動作が行われた後の、その結果としての状態を表現していることがわかる。その点から見ると(20)の「かけ下りた」は状態ではない上に、動詞の中に時間的経緯を含んでいる。だが3種の訳文を見ると、いずれも「かけ下りた」をそのまま訳してはおらず、すべて“消失在……(……に消えた)”と意識している。「夜の底」はかけ下りて到達しようとする目的地ではなく、かけ下りる方向なのだが、そもそも「底」という言葉は目的地を示すものである。即ちこれは、下人が夜の闇の中に姿を消したことの比喩的表現であり、この言葉の中に下人の心の深い闇と、その闇を産み出した世の中の更に深い闇を象徴した一文であると思われる。その比喩的表現を中国語に映すには“消失(消える)”という言葉が最も適切だったのであろう。そして「消える」という動詞は「かけ下りた」結果の状態を表している。

再び「到」について、“在”を離れて見ると、日本語の「～に」に“到”を用いた動補構造が対応している例が更に3例見出せる。

(21) すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてみた屍骸の首に両手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づゝ抜きはじめた。

林：这段时间里，只见老太婆把松明插在楼板缝上，旋即双手掐住眼下死尸的脖子，恰如老猴子给小猴子抓虱，一根根拨起那长长的发丝。

楼：老婆子把松明插在楼板上，两手在那尸体的脑袋上，跟母猴替小猴抓虱子一般，一根一根地拨着头发，……

聶：在惊恐中，只见老太婆把松明插到楼板缝里，然后用双手托起刚才盯着的那具尸骸的头，就像猿猴妈妈给它的子女捉虱子一般，开始一根一根地拔那具尸骸的长头发。

(22)それから、皺で、殆、鼻と一つになつた唇を、何か物でも噛んでゐるやうに、動かした。

林：继而，像咀嚼什么东西似的动了动因皱纹而几乎同鼻子混在一起的嘴唇，……

楼：……然后把发皱的同鼻子挤在一起的嘴，像吃食似的动着，……

聶：同时，皮肤皱得几乎和鼻子连到一块的嘴巴里，似乎在嚼什么东西似的蠕动着。

(23)その時の、この男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出来ない程、意識の外に追ひ出されてみた。

林：不仅如此，作为他此时的心情，早已把什么饿死之念逐出意识之外——这点几乎连考虑的余地都无从谈起。

楼：……现在他已把饿死的念头完全逐到意识之外去了。

聶：要说这个男人此刻的心情，那么饿死这样的事情实在是不能再予考虑了，已远远地被赶出自己的意识之外了。

このうち(22)は、「一つ」が「～に」に導かれて「なつた」の修飾語となっていることから、考察対象から除き、(21)(23)について、それぞれ格助詞のいい換えが可能かどうかを見てみる。

(21)床板の間へ挿して

床板の間まで挿して(?)

(23)意識の外へ追ひ出されてみた

意識の外まで追ひ出されてみた

(23)が「～まで」とのいい換えが可能である。このことは、状態を表す「みた」が置かれているもの、「追ひ出される」の中には「追い出したが、追い出せなかった」が成立するように、時間的経緯が含まれている。同じ「みた」を置く(17)(18)はそれぞれ「(柱に)とまったが、とまれなかった」、「ころがったがころがれなかった」が成立しないことから見て、時間的経緯を含まないと見てよいだろう。その結果(17)(18)には“在”のみが現れ、(23)には“在”は現れず“到”が現れるといえるのではないだろうか。

さて、(21)と前出の(19)は表現が似ている。しかし(19)がすべて“在”を用いているのに対し、(21)はなぜ“在”と“到”に分かれるのだろうか。

“在”がある行為の結果が状態としてそこにあることを表すということから見ると、(21)の林訳、楼訳は共に松明は床板の間に「挿してある」状態の中で、死体の髪を“拨起(抜き始める)”(林)、“拨着(抜いている)”(楼)、ことになる。即ち訳者は「抜く」という行為の方に重点を置いたといえる。一方“到”

を使った聶訳は、「それから」という接続詞で「挿す」と「抜く」という行為をそれぞれ時間軸で分けた日本語に忠実に、「挿す」と「抜く」を“然后（それから）”で分けたと考えられる。

以上の考察から、日本語の動詞に時間的経緯が含まれる、即ち「～したが、できなかった」という表現が成立し、動詞に「～まで」「～に」「～へ」が前置されている場合、中国語の翻訳では「動詞+到」が用いられることが多く、動詞に時間的経緯が含まれるか否かは、「～まで」へのいい換えが可能かどうかによってある程度の見当をつけることができる、と仮定することができるだろう。

六

ここで、「～へ」と動補構造が対応している他の例を見てみることにする。

(24) とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つてきて、棄てゝ行くと云ふ習慣さへ出来た。

林：……最后竟将无人让领的死尸也搬了稿来，且日久成俗。

楼：甚至最后变成了一种习惯，把无主的尸体扔到门里来了。

聶：到了后来，连无人让领的死尸也被拖到罗生门城楼里，任其腐败，风干，久而久之竟成了一种习惯。

(25) そこで、日の目が見えなくなると、誰でも気味を悪るがつて、この門の近所へは足ふみをしない事になつてしまつたのである。

林：这么着，每到日落天黑，人们便觉心里发怵，再没人敢走到此门的附近。

楼：所以一到夕阳西下，气象阴森，谁也不上这里来了。

聶：因此，一到太阳下山的时候，无论是谁路过这里都会因为恐惧而加快脚步，更别说驻足停留了。

(26) 選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。

林：而若不选择——仆人的思路兜了几圈之后，终于到了这一关口。

楼：倘若不择手段哩——家将反复想了多次，最后便跑到这儿来了。

聶：“如果是不择手段”——仆人想，他在这条道上已徘徊良久，最后才来到这个地方。

(17) 丹塗の柱にとまつてみた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

林：那只伏在红漆柱上的蟋蟀，早已不知去向。

楼：蹲在朱漆圆柱上的蟋蟀已经不见了。

聶：……停在朱红色圆柱上的那只蟋蟀，也早已不知藏到何处去了

(27) 下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色を、その眼の前へつきつけた。

林：仆人丢开老婆，霍地抽出腰刀，将白亮亮的钢刀贴到老婆眼前。

楼：家将摔开老婆子，拔出刀鞘，举起来晃了一晃。

聶：仆人挣脱老太婆，猛然抽出腰间的刀，锋利而耀眼的光芒明晃晃地直刺老太婆双眼。

(28) 現に、わしが今、髪を抜いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帯の陣へ売りに往んだわ。

林：我现在拔头发的这个女人，就曾把蛇一段段切成四寸来长说是鱼干拿到禁军营地去卖。

楼：这位我拔了她头发的女人，活着时就是把蛇肉切成一段段，晒干了当干鱼到兵营去卖的。

聶：现在我正拔头发的这个女人，她曾经把蛇切成四寸来长一截，晒干后拿到守卫皇太子宫殿的侍卫们那里去当干鱼卖呢。

以上について格助詞のいい換えを試みると、以下のようになる。

(24) この門に持つてきて

この門まで持つてきて

(25) この門の近所には足ぶみをしない

この門の近所までは足ぶみをしない(?)

(26) この局所に逢着した

この局所まで逢着した

(17) 'もうどこかに行つてしまつた

もうどこかまで行つてしまつた(?)

(27) その眼の前につきつけた

その眼の前までつきつけた(?)

(28) 太刀帯の陣に売りに往んだわ

太刀帯の陣まで売りに往んだわ

以上のいい換えの中で「？」をつけた例を見ると、例えば(25)の「足ぶみをしない」という日本語は特殊な表現である。また(17)'の「行つてしまつた」と(27)の「つきつけた」は、それぞれの訳文の中で意識されていることがわかる。前後の文章との流れなども考慮に入れなければなるまいが、そのままでは中国語になりにくい日本語の表現をどう訳すかについては他の工夫が必要となる。

七

最後に、今回考察の対象とした「羅生門」には、“到”を用いた動補構造に対応する日本語の原文に「～まで」「～に」「～へ」が見られないものも複数存在していることに触れておかねばならない。例えば以下の文は動詞の前に「～を」が前置されている例である。

(29) そこで、下人は、何を措いても差当り明日の暮しをどうかしやうとして——云はゞどうにもならない事を、どうかしやうとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてみたのである。

林：这样，仆人当务之急便是设法筹措明日的生计。也就是说，要为根本无法可想之事而想方设法。他一边沉浸在漫无边际的思绪里，一边似听非听地听着朱雀大路持续已久的雨声

楼：……家将一边不断地在想明天的日子怎样过，——也就是从没办法中求办法，一边耳朵里似听非听地听着朱雀大路上的雨声。

聶：此时，仆人眼前想到的是明天该怎么生活。——也就是说，怎样才能摆脱这毫无希望的困境。他一边不得要领地思索着，一边心不在焉地听着落在朱雀大街的雨声。

(30) 夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した葺の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

林：暮色逐渐压低天空。抬头看去，门楼斜向翘起的脊瓦正支撑着重重压下的阴云。

楼：……黄昏渐渐压到头顶，抬头望望门楼顶上斜出的飞檐上正挑起一朵沉重的暗运。

聶：昏黑的天空伴着雨雾更暗了，仆人下意识地抬眼望了望黑蒙蒙的天空，城楼楼顶那斜翘的雕甍，黑压压的乌云翻滚而来。

(1) 'これを見ると、下人は始めて明白に、この老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてみると云ふ事を意識した。

林：见此光景，仆人这才实实在在意识到老太婆的生死完全取决于自己的意志。

楼：家将意识到老婆子的死活全已操在自己手上，……

聶：看到这种情形，仆人已意识到，这个老太婆的生死，已完全凭自己的意志主宰了。

(31) 勿論、右の手では、赤く頬に膿を持つた大きな面皰を気にしながら、聞いてゐるのである。

林：当然，听的过程仍为右手摸着的脸颊上那个红肿的大酒刺感到心烦。

楼：……右手又去摸摸脸上的肿疱，……

聶：而他的右手，则在自己的右颊上挤着那些已经化脓了的大瘰疮。

いずれも二重下線に前置される「～を」を「～まで」「～へ」「～に」といい換えることは不可能だが、ただ前節でも触れたように、(29) (30) (31) はいずれも意識である。問題が残るのは (1)' の例であるが、これについては考察を改めたい。

また言葉の上に手がかりが見出せない例もある。

(32) 前にも書いたやうに、当時京都の町は一通りならず衰微してゐた。

林：前面已经说了，京都城当时已衰败不堪。

楼：上边提到，当时京城市面正是一片萧条，

聶：正像我前面写到的那样，此时的京城已变得极其荒凉。

(33) 雨風の患のない、人目にかゝる惧のない、一晚楽にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。

林：他想找一处好歹可以过夜的地方，一个没有风雨之患又避人眼目的安然存身之处。

楼：……既可以避整雨，又可以不给人看到能安安静静睡觉，就想在这儿过夜了。

聶：……他想找一个既避风雨有躲人的耳目，能安安稳稳睡一晚的地方。如果有的话，就好歹凑合着过一夜。

(34) この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

林：雨夜里居然敢在这罗生门上点火，笃定不是等闲之辈。

楼：他心里明白，在这儿点着火的，绝不是一个寻常的人。

聶：刹那间，仆人马上意识到：在这个雨夜，刚在罗生门城楼上点亮火光的人，绝不可能是个普通的人。

(35) 下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。

林：仆人对老太婆意外平庸的回答很感失望。

楼：一听老婆子的回答，竟是意外的平凡，一阵失望，……

聶：仆人没想到老太婆的回答会如此平淡，他很是失望。

(36) 外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

林：外面，惟有黑洞洞的夜。

楼：外边是一片沉沉的黑夜。

聶：但看到的只是罗生门外边黑漆漆的夜色。

(33) ~ (36) は意識であるが、(32) は前置されている「～に(も)」は「～へ」「～まで」といい換えがきかない。にもかかわらず2種に“到”が使われている。これらについても、紙幅の制限もあるため、今後の考察の対象としたい。

日本語の動詞に前置される格助詞と、「～したが、できなかった」という表現による動詞の識別はある程度は有効であると思われるものの、やはり多くの文例を見ながらこの仮説の精度を高めることができるかどうかを検証していく必要があるだろうし、また最初にも述べたように、異なる言語である以上は、最初の手がかりをつかむことは有効だが、その後は多くの文例に接する中でその言語に対する語感を養うしかないのだといえる。

註

- 1) 1995年、東方書店
- 2) 2009年、ベレ出版
- 3) 田中・木田・畠山はこれに関して3つの非文となる例文を挙げているが、「壊したが、壊れなかった」は、筆者の語感では非文とはいえない。「捕まえたが、捕まらなかった」も完全に非文といえるかどうか、疑問が残る。
- 4) 日本語教育学会編、1982年、大修館書店
- 5) 私学振興・共済事業団の学術研究助成資金を受けた共同研究「日本語母語話者に対する外国語教授法の研究」の中で、「授受(やりもらい)」表現を中心とした調査を行った。アンケート結果については

別途報告する予定である。

6) 有効回答数はそれぞれ以下の通りである。

ア) 84 イ) 102 ウ) 111

なお、正否は別にして、単語が2つ以上使用されているものをここでは有効回答とした。

7) 増訂版、1999年、商務印書館

8) 2003年、大修館書店

9) 2008年、大修館書店

10) 文の数の数え方については、平石「日中両言語の差異に関するノート——芥川龍之介「羅生門」を手がかりとして——」(『大正大学研究紀要』第94輯、2009年3月)を参照されたい。

11) もちろん、既に述べたように、ここでいう「動補構造」には結果、方向、可能以外の補語は含まれていない。従って47の文中に、ここでいう「動補構造」以外の動補構造が含まれている可能性はあり得る。また、一文の中に動補構造が複数含まれている場合も、ここではあくまでも文の数によってカウントしている。

12) 陳・陸(2008)は“爬”の例文として“这山很高，我们爬了一天也没有爬到山顶。(この山は高く、1日かけても山頂にたどり着けなかった。)”を挙げ、“爬了一天”を時量補語、“爬到山顶”を介詞構造としている。

13) 小学館『日中辞典』(第2版)による。

14) 「①思い出にこの花を置いていくよ。／②みんなここを通っていく。／③ラジオを持っていく。／④雲が流れていく。／⑤トラが獲物に飛び掛かっていく。これらの例文中の「いく」は本来の意味を持っているので、本動詞である。」(『日本語教育事典』)

15) 「それが限度、極限であるという意味を込めて、ある事物を指す」(『日本語教育事典』)

16) 『日本語教育事典』によれば、「～て」の後に用いられる動詞は本動詞と補助動詞に分けられる。本来の動詞の意味を保っていれば本動詞であるが(註14参照)、「次々とゲームが行われていく／次第に明るくなってきた」などは本来の意味から離れているため、補助動詞であるとする。